



# キリスト教から考える「現場」の歴史と未来

小原 克博

(牧師、宗教学者、同志社大学神学部教授)

## 【提題要旨】

火災（殺人）現場、工事現場など、事件が起こったり、作業が行われたりしている場所を「現場」と呼ぶ他、企業では管理部門に対する実務部門（たとえば、工場）を「現場」と言うことがあり、宗教にとっての「現場」も、これらいずれの用法とも重なるものを見出すことができるだろう。キリスト教に即して考えれば、それはイエスが語り、奇跡や癒やしの業を行った「現場」があり、神学という知的管理体制に対し、社会实践（隣人愛）を行う「現場」があると言える。そうした基本的な「現場」を確認するために、まず新約聖書におけるイエスの語りの特徴（たとえ話、メタファー）を整理する。その上で、現代において、聖書解釈（テキスト）と現場（コンテキスト）の関係を考える手がかりとして、解放の諸神学（ラテンアメリカ解放の神学、黒人神学、フェミニスト神学、荊冠の神学）や文脈化の神学（contextual theology）を取り上げたい。

さらに、伝統的な「現場」（現実空間）とは異なる新しい「現場」（ネット空間）が広がっていることにも関心を向けたい。SNSのような情報空間は、伝統的な考え方では「現場」からもっとも遠いところに位置づけられるが、そこで長時間過ごす若い世代にとっては、それこそが「現場」に他ならない。「現場」のバーチャル化が進展する中で、宗教はどのような対応ができるのか、考えてみたい。

（こはら・かつひろ）